
安里のまつろわぬ日々

あずまの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安里のまつろわぬ日々

【Nコード】

N9422X

【作者名】

あずまの

【あらすじ】

安里の使命は人間を守ること。美しい兄から、残酷な父から、何も知らない彼らを守らなければならない。 R15、残酷な描写ありは一応保険。

1、行きはよいよい(前書き)

リハビリ小説です。もうひとつの連載も再開できたらと思っています。

1、行きはよいよい

「なによここ、どこなのよう」

小心者だと自覚のあった愛実はずでに泣き出していた。

どうして自分は森の中にいるのだろうか。これは夢なのだろうか。

しかし夢なのにいつまでたっても覚めてくれない。

転んだ拍子に脱げた革靴は、暗闇の中見つからなくて結局は諦めた。ストッキングは当然破けてボロボロになり、歩くたびに足裏に激痛が走る。

もう嫌だ。歩けない。歩きたくない。

ついに座り込み、膝の間に顔を埋めた。眠れば夢は覚めるだろうか。いや、覚めてもらわなくては困る。

眠れ、眠れ、眠くなれ！

無理だった。こんなにうるさく激しく鼓動する心臓と、震えのおさまらない体で睡眠するなど不可能である。

何がいけなかったのだろうか。

両親の言うことを素直に聞いていればよかったのだろうか。

髪の毛を染めるのをやめて、過度な化粧をやめて、あんな男と付き合わなければよかったのだろうか。

そうすれば見知らぬ場所ですりばつちにならずに済んだ、そういうことなのか。

「お父さあん、お母さあん、環い……！」

助けて。

心のうちで家族に呼びかけた。返事はもちろんない。

どれほどそうしていただろうか。愛実の耳が、今まで聞こえなかった音を拾った。

それは森の静けさを侵す、明らかに人の話し声。

「だ、だれかああああ！！」

これを逃したら私は死ぬ。

あらん限りの声を振り絞って助けを求める。声は掠れ、咳き込んだが、それでも必死に呼びかけた。

「私はここっ、ここにいるよおっ」

目に痛いほどの光が現れたのはその直後だった。

熱い。これは火だ。

反射的に後ずさった愛実は、そのまま尻餅をついた。呆然と見上げると、そこには男がひとり立っていた。

愛実は咄嗟に違うと思った。

「あ、の、」

男もこちらと同じくらい驚いているようだった。こわばった顔が松明（そう、松明！）に照らし出されている。

「いたか？」

不思議ならみ合いはそう長くは続かなかった。別の男が現れたのだ。

彼は愛実を見据えると、驚いたように目を見開いたのも一瞬、すぐに表情を消した。そして着物の中から笛のようなものを取り出し、吹いた。

「なに、なんなのよ、」

笛とか、マジありえないんだけど。

普通は無線機とか、懐中電灯とかでしょ!?

「なのになんなのよあんだ達いつ、」

「落ち着け」

「なあ、俺は初めてなんだが、いつもこうなのか？」

「迷い人は錯乱しているのが常だ」

淡々と会話を交わす男二人から、愛実は徐々に後退していった。逃げなきゃ。

こいつらは変だ。いや、私以外のすべてが変だ、おかしい。

「おい、娘！」

いやだ、いやだいやだいやだ！

言うこと聞くから、謝るから、もう変な男と付き合ったりしない

から！

だから助けてお父さん、お母さん！ 環！

どれほど走ったのか分からない。

突然足の力が抜けて、派手に転んだ愛実はようやく止まることができた。

男たちは意外にも追ってはこなかった。もしくは見失ったのかもしれない。

鬱蒼とした森の中で、愛実は再びひとりになった。

湿った落ち葉の積み重なった地面が、愛実の嗚咽を受け取めてくれた。あたりは静かだった。

もしまた両親に会えるのなら、今度こそ素直になろうと思った。

好きでもない彼氏とも別れようと思った。

意地悪ばかりしていた妹に謝ろう。

できることは、全部するから。

「私を帰して、かえしてよう……」

転んだままの状態で、愛実は訴えた。地面をめちやくちやに殴り、髪を振り乱して、誰かに、何かに訴えた。

返事はない。そう思っていた。

「帰してやるぞ」

先ほどの男たちの声ではなかった。

顔だけ振り返った愛実の目に、松明の光が映った。そのすぐ横に、愛実とそう変わらない年頃の少女の顔があった。

「ったく、こんなとこまで逃げおって、お陰で余計な時間を食ったわ。わしに謝れ」

「……………あんた、誰よ」

「おぬしから名乗れと言いたいところじゃが、まあいい名乗ってやる。わしの名は安里やすりじゃ。特別にさとちゃんと呼ばせてやる」

「いや、呼ばないし……………」

なんだろう、この子。全然怖くない。

松明を地面に置いて、安里と名乗った少女は愛実のすぐ傍までやってきた。

仄明るくなつたお陰で、互いの姿が先ほどよりかはよく見える。

二人でじろじろと眺め回し、同じような表情を浮かべた。

「けつたいな服装じゃな。短いですかーとなんぞ着て、寒くないのか」

「あんたこそ、なんで片方しか手袋してないの？ 超ダサイんですけど」

「生意気な娘じゃな！ わしが来るまで幼子のように泣いておつたくせに」

「そ、それは、」

自分の置かれた状況を思い出すと、愛実の両目にすぐまた涙の膜が張った。

「私、なんで、ここどこよお、」

「ええい、こんなクソ寒いところで泣くな！ 泣くならホレ、もつと暖かい場所に行って泣け」

「暖かい場所ってどこおお」

「わしの家じゃ。わしはおぬしを迎えに来たのじゃ」

立たせようと、安里の手が愛実のわきの下に触れた。途端に愛実は身をよじってそれを跳ね除けた。

「やだ！ 私、私は家に帰りたい！！ 私の家に戻りたいのよ！！」

「今は無理じゃな」

気が高ぶっていた愛実は、無理の部分しか聞こえていなかった。

絶望に包まれ、両手で顔を覆って泣き出してしまふ。

「やれ、人の話を聞かぬ娘じゃ」

安里は大きいため息を吐いた。

ほつっておけばいつまでも泣き続けるだろう愛実に、安里は手を伸ばす。髪に触れ、とても慣れた仕草でゆっくりと撫でた。

「今は眠れ。明日になったら、名を教えるのじゃぞ」

手は愛実のうなじに滑り、ほんのわずか熱くなった。それを合図

に、愛実は糸の切れた人形のように全身の力が抜けて安里に寄りかかる。

「いい匂いのする娘じゃな」

こちらにはない香りだ。安里は子犬のようにくんくんと鼻を鳴らして匂いを堪能した。

それから眠りについた愛実を背負い、森の出口へと歩き出した。

安里たちが消えた頃、松明もまた光を消し、闇に沈んだ。

2、安里と愛実

目が覚めると、木目の天井が愛実を見下ろしていた。

私、おばあちゃんの家に来てたんだっけ？

でも、その割にはお布団重くないなあ。お線香の匂いもしないなあ。

わずかな違和感に苛まれつつも、起きる気がまったくしない。全身が倦怠感に包まれていて、足も痛い。けれどお腹は立派に空いていた。

「おばあちゃあん、いないのー？」

甘えた声で呼べば、おばあちゃんはきつと「はいはい、どうしたの愛ちゃん」と言っただけで来てくれる筈だった。

けれど代わりに来たのは、まったくの別人。けれどどこか見たような。

「だれがおぬしのおばあちゃんじゃ」

お膳を持って現れたのは、十四、五歳の少女。

特別可愛いということもなければ、ブサイクでもない。どこにでもいそうな普通の、それこそ愛実のクラスにいてもおかしくない、そんな少女だ。

髪は長くて、腰まであるのを首の後ろでひとつに結わえてある。まっすぐでとても綺麗だと思った。

袖のない着物と、裾を絞ったような袴を身に着けている。神社のお祭りで見たことがあるような古風な出で立ちだった。

そして肘の上まである手袋を、左手だけに着けていた。

「あんたっ、昨日の！」

「なんじゃ、今思い出したのか」

昨日出会った少女はにやにやと笑いながら、愛実のいる布団近くまでやってきた。なんだか腹の立つ笑い方だったので睨み返してやったが、良い匂いがして、愛実は自分が空腹だったことを思い出し

た。

「朝餉じゃ。食べ」

「う、うん」

食欲にはまるで勝てずに、いただきますと同時にすぐさま白米に取り掛かった。

一粒一粒立ったお米はとても美味しかった。それから漬物も、お浸しも。野菜ばかりの朝食なんて、普段の愛実ならあり得なかった。しかし今まで食べてきた朝食の中で、今日のが一番だった。

「よい食べっぷりじゃな……。……………それにしても、ぷぷ！」

ぷすぷす笑う少女にむかっ腹が立ったものの、今はなにより目の前の食べ物すら平らげることが先決である。

愛実は笑い転げる少女を睨みつけながらも完食した。

「なにがおかしいのよ」

「いやだって、おぬし、顔が違うんじゃないもの」

「顔お？」

「今のほうが愛いぞ、ぷぷっ」

「っな！ あんた、私のすっぴん笑ってるわけ！？ このあんころもち！」

「誰があんころもちじゃ！ わしの名は安里と名乗ったろうに！」

「うるさいっ、あんたなんてあんころもちで十分よ！」

「この眉ナシが言ってくれる！！ というかお前、いい加減名乗らんか！」

「愛実よ！ あ、い、みつ！ あんたよりもよっぽど可愛い名前でしょう！」

「愛を忌むとはなんとまあひねた名じゃの」

「愛が実るよ！」

空になった膳を挟んで言葉の応酬をしていると、開きっぱなしだった襖の先から、突然着物の女が現れた。

まるで幽霊みたいにぬっと出てきたので、愛実は悲鳴を上げてのけぞった。

「何じゃ」

安里は気づいていたのか平然としていた。現れた女に一瞥をくれる姿は、子供っぽい言い合いをしていた先ほどとは別人に見える。

「高嶺様がお見えです」

「なんと。おい愛実、兄上がおぬしに会いに来たぞ」

「たかね、さま？ あんたのお兄さんが、なんで私に会いに来るのよ」

「品定めじゃ。はよう着替えて迎えねば」

現れた女に何事かを告げると、安里は部屋を出て行った。

途端に愛実は一緊張した。

残った女と二人きりにされたことで、不安と恐怖が襲ってくる。なにより女の物でも見るかのような目が怖い。

同じ目をした人物を愛実はまだ一人知っていた。生活指導の教師がそうだった。

女は膳を部屋の端に寄せると、あらかじめ掛けてあった着物を手に近づいてきた。

「それはお脱ぎください」

「で、でも、あの、なんか下に何も着てないんだけど、」

「湯文字はそちらに」

「ゆ、もじ？」

「お早く」

「え、あ、あの、その前に、トイレに行きたいんだけど」

「といれ？」

「げっ、通じないの？」

そういえばここがどこなのか、安里に聞くのを忘れていた。何よりも今知りたいことのはずなのに、なぜかあの少女といると気にならなくなってしまうというか、不安が吹き飛んでしまうのだ。

当たり前のことすら通じないことは、やはり愛実の知る世界ではないのかもしれない。

そう思うと、涙と絶望がせり上がってきた。

いきなり震えだした愛実を見据え、女は表情ひとつ変えはしなかった。いや、かすかに目を細め、不快を示している。

「あさとお、」

「呼んだか？」

「つぎや！ あんた行ったんじゃなかったの！？」

「挨拶は済ませてきた。おい、なぜまだ着替えが済んでおらんのだ」

「この方が」といれ”に行きたいと仰られて」

「といれというのは廁のことじゃ。愛実、わしについてこい。そこのお前は兄上の相手でもしている」

「わ、わたくしがで、ございますか？」

それまで無表情を貫いていた女が一変した。

頬を紅色に染め、目が潤みだす。感激しているのだ。

そんな女を部屋に置いて、愛実と安里は廊下に出た。

「あの女になんぞ言われたか」

「別に、」

「これから何度も顔を合わせるじゃろ。慣れるとは言わんが、気にはするなよ」

安里にしては随分と辛らつな物言いをすると思った。

しかし愛実はすぐにあれつと首を傾げた。

昨日今日会ったばかりなのに、安里のことをそんなふうと思う自分が愛実には不思議だった。まるでもう友達みたいな素振りではないか。

「といれはここじゃ。落ちるなよ」

考えごとをしていたので、ろくに聞いていなかった。

廁に入った愛実は、素つ頓狂な声を上げた。

「なによこれぼつとんじゃない！」

3、高嶺の笑み

「よいか、愛実。兄上に聞かれたことには、「はい」か「いいえ」のみで答えよ。余計なことは言つなよ」

高嶺のいる部屋に入る前に、安里が真面目な顔で忠告をした。

しかし愛実は、そんな簡単なことすらできなかった。高嶺を見た瞬間、すべてが頭の中からすっ飛んでいったのだ。

高嶺は、この世のものとは言えぬ美しさをしていた。

「愛い娘だ」

安里の住まう屋敷を出た高嶺は、笑みを浮かべて言った。

その娘は、今は部屋に戻り惚けている。その姿をありありと思いつかべることができた安里は、やれやれと首を振りたくなった。

「兄上。お戯れにはあの娘は向かぬと思えますが」

「そうだろうか？ 飽かぬ娘であったように感じた」

高く結い上げられた高嶺の髪が、風にもてあそばれて揺れた。彼の心のように気まぐれな動きだ。

空を映しこんだ清流のような髪から、屋敷のほうへと視線を転じ、安里は苦々しい思いを押し隠した。

さて、どこまで本気であるのやら。

言葉のみなら何もしないでおくのが一番だが、下手に妨害などしようなものなら、天邪鬼な兄はその気がなくても娘を攫うだろう。

そうやって不幸になっていく迷い人の娘たちを、安里は何人も見てきたから知っている。

「安里」

「なんでしょう」

「悲しそうな顔をしている」

「それはきつと朝餉の食べ合わせが悪かったのでしょうや」

安里はすつとぼけると、別れの挨拶を朗々と述べた。高嶺は寂しげに微笑んでみせた。すべての者に罪悪感を抱かせるような高嶺の顔に、安里の心がまるで動かなかつたというわけではない。しかし、敢えてそれを見ないようにして、さあ帰れ、今すぐ帰れと念じて見せた。

「また来る」

「ええ、お待ちしております」

「そうだ、近々、鳥女も訪れるだろう」

「承知しております」

「では、ね」

高嶺は最後まで名残惜しげだった。

やがて従者と共に姿が見えなくなった頃、安里は「っけ！」と吐き捨てた。

「気っ色の悪い男じゃ」

「やい、愛実」

「なあにい？」

案の定、愛実は惚けていた。その目は夢見る乙女状態だった。

思ったとおりの有様に、安里は適当にそこにあつた枕を蹴飛ばした。派手な音がしたが、それでも愛実はぼけつと宙を見ている。

「腑抜けにもほどがあるぞ。トロンとしとらんと布団くらい上げんか！」

「高嶺様つてステキよねえ」

「大馬鹿者めっ！面の皮一枚に騙されてどうする！」

「高嶺様、私のことなんか言ってたあ？」

「アホ娘と言っておった」

「うれしいいい」

「目を覚ませ！」

「ったあ！ 何すんのよバカ！」

焦点すら定まっていなかった目にはつきりとした光が戻る。安里はほっと息をつき、きいきい怒る愛実に指を突きつけた。

「帰りたくないのか」

「は？ え？」

「家に帰りたいのじゃろう？」

「当たり前じゃない」

「では兄上のは忘れる。あれは魔性じゃ。川の中から、おいでおいでをしている河童みたいものじゃ」

「高嶺様がカツパー！」

「たちが悪いということじゃ。自分の側に引きずりこんで、苦しむ様を見て楽しむのが兄上の趣味といってもいい」

「それも無意識に、だ。」

兄、高嶺の困った性癖だった。

彼には、心がない。情がない。それを本人も気づいていない。

無責任に他人を魅了し、人生を狂わせる。可哀相にと嘆いてみせるも、次の瞬間にはけろりとしている。

高嶺ばかりではない。他の兄弟らも同じようなものであることが、安里の悩みであった。

「いいか愛実、家に帰れるかどうかは、お前しだいだ」

「私？」

「そつだ。あと、これを返しておく」

紫色の風呂敷包みを渡された愛実は、なにと視線で安里に問うた。開けてみると言われて素直に結びを解くと、あっと驚かされた。

「私のカバン！」

「朝のうちに拾ってきた。無くなっているものがないか確認せよ」
「う、うん！」

学校指定ではない茶色のバッグ。

お気に入りのマスケットキーホルダーは泥に汚れていたが、無く

なつてはいない。ファスナーを開けて、まず携帯を取り出す。バッテリーは残っていた。しかし圏外。

買ったばかりのダイアリー、財布、ファッション雑誌、化粧道具、食べかけのお菓子。

教科書が一冊も入っていないのは最初からだ。すべて揃っていた。向こうにいたときと同じ愛実のカバン。

「大事にとっておくのだぞ。一日に一度は触れるといい」

「それが、帰ることと何か関係あるの？」

「ある」

安里の怖いくらい真剣な眼差しが愛実を見据える。手袋をつけた左手が、愛実の肩を強く握って引き寄せた。

「二人じゃ」

「え？」

「迷い人、おぬしのことを我らはそう呼ぶ。愛実、迷い人はお前が初めてではない」

「そう、なの？ 私みたいなのが、今までに二人いたってこと？」

「違う。そうではない」

さらに引き寄せられ、鼻と鼻が触れ合いそうになる。照れて思わず顔を引いた愛実だったが、安里がそれを許さなかった。

「いいか、よく聞くのだぞ愛実」

「な、に」

「もう数えるのも嫌になるほどの迷い人を、わしは迎えてきた。その中で、帰ることができた者は二人だけじゃ」

愛実の体がぶるりと大きく震えた。それを押さえ込むように、安里の指が肩に食い込んだ。もたらされた痛みが、愛実をほんのわずかに冷静にさせた。

「……………嫌になるほどって、どれくらい？ 十人？」

「もつとだ」

「百人？ 千人？ ねえ」

「もつと、もつとだ」

「なのに二人だけ？」

涙も出ない。こみ上げるものはあったが、そこまでだった。

「どうして、どうしてよ」

「理由は様々だ。望んで帰らなかった者もいる。だが、………残った者が、幸せだったかと聞かれれば、わしはそうだとは言えぬ」

愛実はまだ限界だった。ぱくぱくと酸素を求めるように唇を喘がせたので、安里は布団に寝かせてやった。

帯を解き、襦袢一枚にすると、掛け布団を首まで掛けてやった。

「月が巡るまで待て。その間、己が己であることを忘れるな。大丈夫じゃ、わしが必ず帰してやるゆえ」

「ほんとう？」

「嘘は言わぬ」

その言葉に安心したのか、愛実は目を閉じ、やがては眠りへと落ちていった。

化粧を拭い去り、眠ってしまった愛実の顔の、なんと稚いことか。安里は枕元に侍り、いつまでもその寝顔を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9422x/>

安里のまつろわぬ日々

2011年10月26日12時13分発行